神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

移動表現に関する日中対照研究―認知意味論の立場から

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2021-12-14
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Cho, Gan
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2596

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

張岩氏博士論文審査の要旨（別紙）

□　テーマ

本研究は、現代標準中国語の経路移動動詞“过”“出”“进”と、これに対応する日本語の移動動詞「渡る」「出る」「入る」、そして起点をマークする前置詞“从～”と「～から」の意味用法に見られるズレを分析した対照研究である。道具立てとしては、主として Talmy(2000)、Langacker (1990、1991)、池上（2006、2011）など、認知意味論における理論的枠組みが用いられる。

□　構成

序章では、論文全体の構成が紹介され、続く第一章では、系統の異なる言語の対照研究のための共通の枠組みを設定すべく、Talmy による移動事象の構成要素に関する基本的な規定が注意深く確認・紹介される。言語類型においてポイントとなるのは、移動事象の中核である経路を担う成分が節の主要動詞であるのか（動詞枠付言語）、動詞に付随する不変化詞などであるのか（付随要素枠付言語）ということになる。

第２章から第５章が、具体的な言語現象を分析したこの論文の中核部分であり、それぞれ、第２章で“过”と「渡る」、第３章で“从～”と「～から」、第４章で“出/进”と「出る/入る」の対照研究が展開され、第５章では、中国語の移動動詞の類型論的位置付けに関する議論の焦点となってきた問題、すなわち、移動動詞が別の動詞の後続成分として用いられる場合（以下、本論文の呼称に従い「動趨構造」と称する）が扱われる。

終章には、本論文のまとめと、今後の課題や展望が述べられている。

□　本論（第２章～第５章）の概要と審査員による評価

第２章　経路動詞“过”の意味分析―「渡る」との対照を通じて

この章は、2018 年度 11 月にアジア・アフリカ研究の視野における日本学国際シンポジウム（査読あり、当学会における院生論文賞二等賞を受賞）で口頭発表し（発表題目：「日本語移動動詞の意味と文構造―「渡る」「通る」を中心に」）、査読誌《高等日语教育》(2020 年 6 月、北京：外语教学与研究出版社）に採択された論文「日语位移动词的认知凸显及其与句法结构的互动―「渡る」「通る」为例」を日本語化し、加筆修正を加えたものである。

“过”は中国語の経路移動動詞の中で、日本語に対応する動詞を見出すことが最も難しく、教学上の難点の一つとなっている。本章では、その要因として、“过”の表す移動事象の構成要素に起点と着点が含まれておらず、その目的語が場所性よりも通常の他動詞の目的語に近い振る舞いを呈することが示される。これに対して日本語の「渡る」には起点と着点が含まれるので、これにより、用法上の非対応関係が説明されることとなる。

主張内容には一定程度の合理性が認められ、p. 42 の例文(27ab)の対立等には興味深い観察が含まれている。“过”の目的語名詞句に関する従来の研究の観察とも整合性があり、教学上有効な説明につながる可能性を孕んだ結論を導いている。

審査員からは、示された用例の多くについて、“过”と「渡る」の対照と“过来/去”との対照に混乱が見られる点、中国語の指示詞が二項対立であるのに対し、“过”の意味分析のために空間が 3 つに分けられることの整合性の問題などが指摘された。

第３章　介詞“从”のプロファイルと機能

この章は、2018 年 7 月に第 8 回現代汉语虚词研究与对外汉语教学国际学术研讨会（査読あり）で口

頭発表し（発表題目：「介词“从”的认知解释及其句法表现」）、査読誌『中国語文法研究』（2019 年 7 月）に採択された論文「介词“从”的认知凸显及其句法表现」を日本語化し、加筆修正を加えたものである。

従来、中国語学における記述研究において、“从”には「中間経路を導く」用法があるとされ、それが日本語の「から」との非対応の要因であるとされてきた（例：“学生从食堂穿过”に対する「学生達は食堂 *から/を 通り抜けた」）。この章では、“从”が表面上中間経路を導くように見える用例は、この前置詞が直接スコープによってプロファイルされる範囲を比較的自由に拡大したり縮小したりできるためで、これに対して日本語の「から」はあくまでも客観的な起点しか導かないので、非対応が生じる、と主張する。新しい観点からの説明となっており、一応の筋道は示されている。

審査員からは、主張は理解できるが、必ずしも論証に成功しているとは言えない点、張岩氏の根拠の一つである「想起実験」の有効性が疑わしい点、張岩氏の主張する「“从”と共起する動詞の特徴」が大雑把すぎて結局「なんでもあり」になってしまう点、目的地を表す助詞に「まで」だけが取り上げられており「へ」「に」が取り上げられていない点、教学上は“我们从这条路走吧”（この道 から/を 帰りましょう）の「この道」は「中間経路」だと説明する方が学生に理解されやすいことなどが指摘された。ただ、ネィティブの審査員は、論文全体ではこの章に最も価値が認められる、とした。

第４章　日中対照から見た「出入り動詞」の対立と認知類型

この章は、2017 年 12 月に日中対照言語学会第 38 回大会（査読あり）で口頭発表し（発表題目：「移動事象から見た日中移動動詞の対立―「入る」「出る」“出”“进”を中心に」）、大幅に分析内容を変更し、洗練させつつ、さらに二つの学会や研究会でその成果を公開してきた研究を論文化したものである。

研究の出発点は、金田一秀穂氏による第九回中日対照言語学国際シンポジウム（2017 年 8 月、中国・北京）の基調講演「日本語の認知の視点」における「日本語では「宇宙に出る」「社会に出る」というところを、中国語ではなぜか「宇宙に入る」「社会に入る」と言う」という指摘である。

張岩氏は、中国語の“出”“进”の意味範囲は非対称的であり、“出”が「起点からの離脱」、とりわけ「起点」にフォーカスするのに対し、“进”が「着点への侵入」、とりわけ「着点」にフォーカスすることから、着点としての「宇宙」や「社会」への移動には“进”が選ばれることを述べている。

張岩氏は指摘していないが、中国語における対を成す移動動詞に起点と着点の指向性について非対称性が見られるものは他にもあり（“上”と“下”、など）、さらには、中国語の動詞の意味範囲が日本語よりも事象を細切れにする傾向も見られることから、この記述には体系性が想定される点で興味深い。

審査員からは、Langacker や池上の「事態把握」を持ち出すのが必ずしも適切ではない点、張岩氏の主張する“出”の特徴が派生的な用法には当てはまらない点（例：“想出一个好主意”（良いアイディアを思いついた）は着点に至っている）、「宇宙に出る」の説明：「日本語の「入る」は認知主体が着点にいて、「出る」は認知主体が起点にいるため」としたのでは、「入って来る」と「入って行く」の両方が可能な表現であることを説明できない点などが指摘された。

第５章　移動表現の類型論から見た中国語の動趨構造

この章は、博士論文執筆の際に書き下ろされたものである。

中国語を「動詞枠付言語」とするのか、「付随要素枠付言語」とするのかには議論が割れており、議論の焦点は、動趨構造（様態動詞＋経路動詞）の前項動詞を主要部とするのか（この場合は「付随要

素枠付言語」であることになる)、それとも後項動詞を主要部とするのか(この場合は「動詞枠付言語」であることになる）にかかっている。張岩氏は主体移動表現のうち、有生物移動の場合は後項動詞が主要部となり、無生物移動と客体移動表現の場合は前項動詞が主要部になると主張する。

張岩氏は明記していないが、この結論は動趨構造の上位カテゴリーである動補構造の最新の知見に合致しており、全く独立した議論であるのに方向性として一致している点で興味深い。

審査員からは、中国語学において多くの蓄積のある「焦点」に関する議論が適切に参照されていない点、自身の主張に対する十分な検証が欠けているため、論述が説得力を欠く点などが指摘された。

□　公開審査会（最終試験）

張岩氏の博士論文公開審査会は、2021 年 7 月 6 日 13 時 30 分から、神戸市外国語大学三木記念会館で実施され、任鷹（副査)、岩男考哲（副査)、丸尾誠（外部審査員・名古屋大学教授)、下地早智子（主査）が審査に当たった。新型コロナウイルスの感染拡大が収束していないことから、外部審査員はオンラインでの参加となったが、ハイブリットでの開催としたことにより、学位取得を目指す本学の多くの大学院生が参加し、フロアは満席であった。また、中国からオンラインで参加した院生も 1 名あった。

試問に先立ち、申請者は論文の概要について 20 分間の口頭発表を行なった。続いて、審査員一人一人からコメントと試問があり、日本語非母語話者である申請者の日本語執筆能力の高さや読みやすさ、いくつかの指摘の興味深さや学術的意義を肯定するコメントとともに、前段で記したように内容に踏み込んだ忌憚なき指摘が相次いだ。各章毎の細部の問題点に加え、論文全体を貫く統一した観点の欠如や、各章の関連性が必ずしも明確でない点などに関しても、複数の審査員から厳しい指摘があった。張岩氏は誠実に説明に努めたが、各審査員からの指摘の鋭さから答弁に窮する場面も見られた。また、審査員からは、多くの修正すべき点に関する指示や建設的な助言もあり、張岩氏はその全てを率直に認めて、加筆・修正に努めることを約束した。

公開審査後、速やかに審査委員会が開催され、審査委員 4 名全員で評価等に関する協議を行った。総評としては、先行研究への目配りが不十分である点や、オリジナルの用例の少なさ、論述の粗雑さ、形式的なミスなどの欠点がかなり目立つものの、本学に入学してからのスタートとなった空間移動表現に関する日中対照研究を 5 年にわたって地道に一歩一歩進めてきた熱意と努力、身近で興味深い現象を研究対象にすくい上げる慧眼、一見単純な用例について様々な角度から粘り強く分析しようとする研究態度、そして一定程度独自の方向性を示し得た点は評価できる、という意見で一致し、全会一致で最終結果を「合格」とすることに決定した。

以上